

随想

「喜ばしいこと」

愛知淑徳高等学校 芸術科書道教諭 中村 均



それはもう書に出会い、書の美しさを発見したことです。それを三十年近く淑徳中高の若い生徒達に教えることが出来たこと。自身の職業とすることに喜びと感動をもつて携わることが出来る。これ程幸せなことは有りません。

先日そんなことがありました。一学期の後半は「行書」の単元です。授業中一人の生徒が「先生、行書で名前がきれいに書きたい」と言います。私は「どれどれ」と言いつつ、さらさらと。すると周囲からも「私も」「私も」と声が掛かります。それではと言うことで急遽「行書で名前を美しく」これを単元とすることにしました。選択者全員の氏名を半紙に書きました。教室で手本を配布するところでしよう。あちらこちらで小さな歓声が上がりました。「こんなカッコいい名前初めて見た」「先生ありがと」声に出して言ってくれる生徒がいります。私は「しめしめ」思うと同時に「これはスゴイことだ」生徒達は書によさ、すばらしさを実感している。千年前の少女達も道風の書を見て「輝くばかり眼にみゆ」と

言ったではないか。私が道風と比肩し得ると、そんな不遜な気持ちは毛頭ありません。しかし書のよさに眼を見張ると言う意味では同じですね。切実さは関心の高さです。「書はオシヤレ心だね。センスよく」と原理、原則を説明すると喰いつきが違います。残念ながら高尚に触れるところまでには授業では到りません。しかし導入は完全にクリアしています。

私の好きな「かな」の書は千年前の切実ですね。和歌の朗詠があつてのかなの美しさです。歌を美しくしたためることが素敵な彼との出会いを約束するものでした。彼女達が必死で磨いた書のみは岩間をつたう一条の流水にもたとえられます。数条流れ下る清流からはせせらぎまで聞こえて来そうですね。朗唱する呼吸と右手の右旋回をえがきながら流れ下るリズムは大変心地よい。美しさの極みです。日本人の生理にびつたり感応します。書の高尚は美の沃野です。一人でも多くの生徒をその沃野に導きたい。私は願っています。